

望岳山荘

いっ

中嶋嶺雄

この七月初旬のメキシコでは、革命後七一年ぶりの政変が起こって注目されたけれど、本紙の六月二十九日付紙面には、「馬場称徳氏の業績に光」メキシコ革命で活躍の外交官」と題する記事が載っていた。それは、革命期の一九一四年に北部メキシコに潜入して邦人移民の避難・救済に当たった馬場称徳をめぐる展示が松本市内田の重要文化財・馬場家住宅で開かれていたというものであった。

て東京外国語学校を卒業し、外務書記生となってシカゴ領事館に勤務した。メキシコ革命の動乱に際しては現地へ派遣されて革命軍の指導者パンチョ・ビリヤと生死をかけたわたりあり、丹羽昌一氏の小説『天皇の密使』のモデルにもなったが、帰国後は東京外国語学校で教鞭をとり、昭和十九年に帰郷、昭和四十五(一九七〇)年に八十九歳で没したという。

しや記載がなかったらどの一抔の不安を覚えながら縊りてみたのだが、幸いにも馬場称徳についての数行にわたる記述が個別史の部の「スペイン語」編にあり、東京外国語学校の教官時代に校庭で撮ったと思われる写真も掲載されていた。



その記述や教官一覽によると、馬場称徳はきわめて例外的な教職歴をたどっていたことに気づかされる。明治四十(一九〇七)年三月に卒業して外務省に入ったのだが、在学中からスペイン語がよくできたのであろう、卒業直後の四月から十一月まで外務省に在職のまま母校のスペイン語

講師となり、外交官生活ののちの大正十二(一九二三)年十二月に再び講師に復職している。以後昭和十六(一九四一)年七月まで十九年間も講師を勤め、西語部の中心的存在であった金沢一郎教授の退官後二年足らずのあいだ教授となった

馬場称徳と東京外語

が、昭和十八年三月には教授を退職、再び一年間講師を勤めた後、昭和十九年三月に退官している。

史の「スペイン語」編を執筆した寺崎英樹教授にもこれらの件をお話し、七月末まで開催という「『天皇の密使』馬場家第15代当主・馬場称徳の軌跡展」を友人と一緒に先週参観することができた。帽章をつけた昔の外語生の制服姿の写真や

私には早速、サントリミステリー大賞を受賞した丹羽氏の小説『天皇(エンペラドール)の密使』を文藝春秋から直接入手してわくわくしながら読了し、『東京外国語大学

外交官時代の電文控え、古い皮トランクなども興味深かったが、馬場称徳が教授になったときの「任東京外国語学校教授 叙高等官七等」という近衛文麿首相からの辞令と教授退官時の「依願免本官」という東條英機首相からの辞令は特に印象的だった。

夫妻にもお目にかかり、お話をうかがっていると、大豪農の家系ゆえ経済的には恵まれていながら病弱の後半生だった馬場称徳ならではの教職歴を解くカギが見えてきたように思われた。馬場称徳に教わり、本郷のお宅にも参上したという東京外大名教授の荒井正道先生ともお話ししたが、万年講師としての馬場称徳は、泉鏡花の小説の主人公を想わせるような優雅な風情で、栄達などに無縁な飄々とした存在であったという。

東京への帰略、松本インターから高速道路に入ると、ちょうど馬場屋敷の近くに差しかけたあたりで、皆既月食の夜の大きな満月が鉢伏山頂に昇りはじめた。八年程前に力り

(東京外国語大学長 松本市出身)